え、転生？ウソでしょ！？

共通言語

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

え、転生？ウソでしょ！？

【Ｎコード】

Ｎ５３５５Ｘ

【作者名】

共通言語

【あらすじ】

死神の不手際で、死ぬはずじゃなかったのに、死んでしまった不幸な青年が、異世界でセカンドライフをさせられることに。チートみたいな、つーか、チートを身につけたことで彼の生活はどのようになるのか！？　※チート、ご都合主義が苦手な方は、回れ右して退避ください。飛び火しｍ（ｒｙ

第零話　自称神（笑）、現る（前書き）

転生物が書きたくなったので、書きます。

いつまで続くか……

第零話　自称神（笑）、現る

いやぁ、転生って漫画の世界の話だよねー……

「はい、現実逃避しない」

だって、あれだぜ？

俺、確か海外に一人旅してたはずなんだよ？

で、ホテルで寝てたら、そのホテルがテロに遭って崩壊。

あぁ、死ぬんだなぁ……なんて、落ちてくる瓦礫を眺めてたんだ。

それで、気が付いたら目の前には、羽を背中につけた女の人。

しかも、「私は転生神、パメティア」なんて言い出した。

……頭、わいてんのか、この人？

「ちょっと、失礼じゃない！！それに、この羽は本物よ！」

さっきから、なんなんだよ。

人の思考を読まないでほしい、まったく。

ま、こんな頭イった奴は放っておいて。

「こらこら、曲がりなりにも神である私に向かって、そんな暴言吐いてもいいと思ってんの！？」

うるさいなぁ。

「誰のせいよ！……ンンッ、改めて、私は転生神よ。あなたは死神の手違いで、死ぬはずじゃなかったのに、殺されちゃったの」

死神？なにそれ、どこのファンタジー？

だいたい、頭イった奴の言葉って信用できないし……

「お願い！！話が進まないから、私の話を聞いて！！」

半泣き状態ですがってくる、自称神。

「もういいわ、自称でもなんでも。とりあえず話の続きをするわ。

で、本当は死ぬはずじゃなかったのに、殺しちゃったから、私が別の世界に転生してあげることになったの」

つまりなんだ？

コイツの言ってることを信用するなら……

1．俺は死ぬはずじゃなかったのに、殺された。

2．そのままにしておくのは、なんだか心苦しい。

3．だから、他の世界に転生させてあげる。

ってこと？

「そうそう、理解が早くて助かるわ」

……ハッ、笑えない冗談だな

やっぱこの人、頭おかしい。

精神科に行くことをお勧めしよう。

そうだ、そうしよう。

「そこまで言う……？」

またもや泣きそうになった、自称神（笑）。

「笑うなぁぁぁ！！……もういいわ。あなたの転生は決まったことだし、さっさと転生させてしまおう。正直早く解放されたい……」

自称神（笑）がそう言った途端、俺は光りに包まれた。

お、おい、ちょ、眩しい！！！

おいコラ、自称神！！何とかしろ！！

「おぎゃぁぁ！！おぎゃぁぁ！！」

……え？どゆこと？

普通に喋ろうとしたら、おぎゃぁぁ！！しか言えないんだけど……。

「あなたはその世界で、一から人生をやり直せるの。ま、セカンドライフね」

こんなセカンドライフいらねぇよ！！

「あ、そうそう、転生モノのテンプレも、ちゃんとしてあげてるからね」

どういう意味だよ！！

「つまり、チートみたいな能力を付けてあげたの。じゃねー、これでも私忙しいからー」

おいいいいいいいいいいいい、置いて行くなぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！

「おぎゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

こうして俺の、自称神（笑）曰く「楽しい楽しい（笑）セカンドライフ」が幕を開けたのだった。

第一話　俺、転生させられました。

―時間が経つのって、早いよね……

あれから、はや十年。
俺は十歳になっていた。
十歳にもなれば、この世界の事も否応なくわかってしまうってもんだ。

この世界は、アンゲル大陸、プラン大陸、デスピア大陸の三大陸に分かれている。
そして、その大陸間は馬鹿でかい橋でつながっていて、三角形を形作っている。
俺が住んでいるのは、三大陸の中でも最も大きいデスピア大陸。

ここで、それぞれの大陸の特徴を軽く説明しておこう。

デスピア大陸。
ここは最も発達しており、快適な生活を送る事ができる。
さらに、学園（元の世界で言う、高校のようなもの。正確には違うが）が唯一存在している。
それもあって、人口密度は最も高い。

アンゲル大陸。
ここもデスピア程ではないが、ある程度発展している。
が、ここは主に工業、農業をしているため、住んでいる人はデスピアよりは少ない。

武具などは、ここで作られている。

そして、プラン大陸。
ここは最も開発が進んでおらず、ジャングルに近い状態。
もちろん住んでいる人はかなり少ない。
また、主にここでは狩りが行われる。
狩りで手に入れた素材で、衣服などを作るのだ。

まぁ、こんな所か。
あ、あとこの世界には種族って物がある。

まず、魔法を得意とする「魔人」。
白兵戦を得意とする「獣人」。
知略に富んだ「精霊」。
そして、オールラウンダーの「人」。

これを聞く限り、人が強いんじゃないか？って思うだろう。
だが、そうではない。
人はオールラウンダーだが、秀でた物がない。
それ故に、魔人に魔法では勝てず、白兵戦では獣人に勝てない。
精霊に知略では勝てないのは、言わなくてもいいだろう。
つまり、人は相手の戦い方に合わせて、戦い方を変えれるのが強みなのだ。

最初、種族があることを知った時、種族間の抗争とかあるのかと思った。
だが、この世界は平和そのもの。
種族が違うからと言って、差別があるわけでもない。
時々、種族間の抗争はあるらしいが、それも小規模なものばかり。
元いた世界に比べれば、かわいらしいものだと思う。

……しかし、俺は誰に説明してたんだろ？
そんなことを思っていると。

「レイー！手伝ってちょうだい！」
「わかったよー」

母さんに呼ばれた。
あ、ちなみに今の俺の名前は、「レイ・サイズニア」。
俺は自分の部屋から出て、母さんのいるキッチンに入った。

「これを盛り付けて頂戴」
「わかった」

柔らかな笑みを浮かべた母さん。
母さんの名前は「アンネ・サイズニア」。
この人は、俺の産み親ではなく、俺を養子にとった人だ。
十年前、俺はこの家の玄関に捨てられていたのだ。
そしてあの自称神（笑）に向かって叫んだ時に、出た鳴き声に気が付いた母さんが、俺の事をここまで育ててくれた。

「こんな感じでいい？」
「ええ、いいわよ」

母さんは、俺の頭をなでながら笑いかけてくれた。
……悪い気はしない。

「まったく、レイはよくできた子だな」

そう言って、キッチンに顔を覗かせたのは、親父だった。

親父の名前は「ヴィル・サイズニア」。

「親父がダメなだけだよ」
「ウフフ、レイの言う通りね」
「うっ……」

親父は家事が全くできない。

「あっ、そうだ、レイ。あとで剣術の稽古をしよう！」
「あ、話逸らした」
「うっ……」

親父は学生時代、剣術が得意だったらしく、暇があれば俺に剣術を教えてくれた。
母さんは魔術が得意だったらしいので、親父と同じく俺に魔術を教えてくれていた。

「ま、まぁ、そういうことで。飯が出来たら呼んでくれ」
「あ、逃げた」
「うわーん！息子に苛められるよー！」

親父は泣きながらキッチンから走り去った。
大の大人が泣きながら走り去る……シュールな光景だった。

そして、昼飯を食い終わった後、俺は親父に剣術の稽古をつけてもらった。

最近になって、自称神（笑）が言っていた、俺に付けたチートがなんなのかが分かり始めた。

それは、「人」という種族にしてはおかしい身体能力だった。
さっきだって、親父との剣術稽古で俺が圧勝しちゃったし。

いや、それだけじゃない。

普通、魔法は一つずつしか使えない。
例えば、炎を出している時は、それ以外の魔術が使えない。
いくら「人」が頑張っても、魔法を切り替える際の隙が無くなるだけ。
「魔人」であっても、同時に二つの魔法を使うことが出来るのは、少数しかいないらしい。
だが、俺はいくらでも同時に魔法を使うことが出来る。

このことを知っているのは、俺だけ。
両親にも言ってはいない。

さらに、「精霊」並みの知略を何故か持っていると来た。
何故そんなことが分かるかというと、「精霊」が知略を鍛えるための本をたまたま手にする機会があった。
その時、俺はそこに書いてあった問題を、悉く簡単に解いてしまったのだ。

あの時は唖然とした。
チートにも程があるだろうに。
あの自称神（笑）は加減というものを知らないのだろうか？

「まぁいいや」
「レイ、どうしたの？」
「あ、いや、なんでもない」
「そう？あ、そうだ。明日街の方にお使いに行ってきてくれないか

しら？」

母さんが俺にお使いを頼むのは、珍しいことじゃない。だって、親父がアレだから。

「レイ。今失礼な事を考えなかったかい？」

「人の思考を読まないでよ」

「あぁ、すまんな。……って、そこは「なんでもない」っていう所じゃないか？」

「いや、思ったことは本当だし、否定するのもなぁ、って思って」

「うわーん！息子に苛められるよ！」

親父はソファに置いてあったクッションに顔をうずめて泣き出した。

「お使いって何買ってくればいいの？」

「せめてスルーしないで！」

「明日メモを渡すから、それを買ってきて頂戴」

「アンネまでスルー！？」

母さんにまでスルーされ、再び親父はクッションに顔をうずめたのだった。

第一話　俺、転生させられました。（後書き）

転生物って、主人公がどうしてもメタ発言してしまうのは、僕だけでしょうか……？

僕の文章が見るに堪えない時は、遠慮なく「ｍ９（^Д^）プギャｌ」してくだｓ（ｒｙ

第二話　どの世界にもやられ役っているんだなぁ。（前書き）

第二話　どの世界にもやられ役っているんだなぁ。

次の日、昼を食べた後、俺は母さんに頼まれていたお使いに出かけた。

「えっと……？鶏肉に、牛肉に、卵に……」

俺はメモに目を通しながら、街の方へ向かって歩いた。
俺の家は街から徒歩十分程離れている所にある。
ちなみに隣りの街までは、徒歩だと一時間半ぐらいかかる。

「……凄い量だな」

いや、俺が十歳じゃなかったら大丈夫な量なんだけど……。
時々、母さんがドSなんじゃないかと思う。

「まぁ、いいや」

俺は母さんの行きつけの店に行くことにした。
店の前に着くと、店主が俺に気が付いた。

「おぉ、サイズニアさんとこのボウズじゃねぇか！」
「こんにちは、オッチャン」
「おう！今日はどうした？」

俺はオッチャンにメモを見せた。
ちなみにこのオッチャンとは、そこそこ仲がいい。

「ん？おお、お使いか。ちょっと待ってろ」

オッチャンは店の奥に引っ込んで行った。
この店は食材ならなんでも揃うし、その割に安いという評判の店なのだ。
しばらく待っていると、近くで男の怒鳴り声が聞こえて来た。

「ん？」
「おいババァ！！どこ見て歩いてんだ！」
「す、すいません……」
「すいませんで済むわけねぇだろ！！」

声のした方を見ると、そこには尻餅をついた状態のお婆さんと、それを立ったまま見下ろして怒鳴りつけている男がいた。
どうやら、お婆さんにぶつかった男が言いがかりをつけているのだろう。

「すいません……」
「そればっかりかよ、あぁ！？」
「ひっ……」

周囲の人は関わりたくない一心からか、見て見ないふりをしていた。
その時、一人の女の子がお婆さんに駆け寄った。

「や、やめてください！！」
「なんだ？ガキはすっこんでろ！！」
「きゃっ……！」
「ちっ……プロテクト！」

そして、男はお婆さんに駆け寄った女の子を殴り飛ばそうと、腕を振り上げた。
俺は見てられず、女の子を守るように魔術で防壁を張った。

ガツンッ！！

「いってぇぇぇ！？」

男は防壁に気付かず、そのまま拳を振り下ろし、防壁を殴りつけた。
俺はお婆さんの元へ行き、声を掛ける。

「大丈夫ですか？」
「え、えぇ……」

そうしていると、男が復活したらしく、俺を睨み付けてきた。

「なんだテメェ……ガキはすっこんでろってんだよ！！」
「ひっ……！」

女の子が男の剣幕に驚き、尻餅をつく。
俺は女の子の前に立ち、男を見上げるような格好になった。

「アンタさ、こんな女の子とお婆さん苛めて楽しいの？」
「ンだと！？俺はただそこのババァがぶつかってきたから怒ってんだよ！！」
「もしそうだとしても、お婆さんを助け起こさないどころか、怒鳴り散らすって、人としてどうかと思うよ？」
「この、ガキ！！なめたこと言いやがって！！」

再び拳を振り上げ、俺に向かって振り下ろそうとした。

俺はそれを落ち着いて避けた。
そして。

「フリーズ！」

バキィッ

「な！？」

男の下半身は、俺の一言によって氷漬けにされた。

「な、なんだこれ！おい、ガキ！なにしやがった！」
「後は警備団体の人に任せよー」
「おいぃ！聞いてんのか！！」

男が何か喚いているが、無視して女の子とお婆さんに向き直る。

「立てますか？」
「あ、あぁ、大丈夫だよ」
「じゃ、あっちに行きましょう。ほら、君も」
「え？」

俺は尻餅をついたままだった女の子に、手を差し出した。
女の子は恐る恐るといった感じで、俺の手をとった。
そして、男を放っておいて、俺達は広場に向かった。

「ありがとねぇ」
「いえいえ、そんな」

お婆さんは俺にお礼を言ってくる。

「すごいねぇ、その年で魔法を使えるなんて」
「いえ、母の教え方がうまいだけなので……」
「そうかい」

俺はそこであることを思い出した。

「あっ、お使い……！」
「あら、お使いの途中だったかい？それは悪かったねぇ」
「いえ、それじゃ、これで！」
「あ、あの！」

俺が駈け出そうとした時、女の子から声を掛けられた。

「なに？」
「あ、あの、名前は……？」
「レイ・サイズニアだよ。君は？」
「さ、サフィ・アンダーハートです……」
「サフィだね！じゃ、また！」

俺は急いでオッチャンの元へと急いだ。
若干オッチャンに怒られてしまったが、無事お使いを終えることが出来たのだった。

第三話　ヴェルス学園の入試　その一

あれからさらに五年。
俺は今日十五歳になる。
そして、明日はヴェルス学園の入試日である。

「頑張ってね」
「レイならできるぞ！！」
「わかったから親父、強く叩くな」

俺が受けるヴェルス学園は、数ある学園の中でも有名な学園の一つである。
何故か？それはヴェルス学園の卒業者は、騎士団に所属するか、ギルドの有名ランカーになっているからだ。

騎士団ってのは、いわゆる警察のようなもの。
治安維持のため見回りしているのをよく見る。
入団するには、実力があるだけでなく、人格者である必要もある。
そのため、騎士団に入ることは、名誉な事なのだ。

ギルドの方は、いわゆるモン〇ンのようなのが、メインの仕事。
それ以外には、騎士団のような活動をすることも。ただし有料で。
また騎士団とは違い、ギルドは実力があれば、有名ランカーになれる。
が、実力を持った者は多くいるため、すぐに埋もれてしまうのだ。
その中で、有名ランカーになれた奴は並外れた実力の持ち主ということ。

だから、ヴェルス学園は有名なのだ。しかも全寮制。
そして、そんな有名な学園にどうして俺が受験をしに行くかというと。

「レイなら、ヴェルス学園でも余裕で合格できるんじゃね？」

親父のこの一言のせいで、母さんまで乗り気になって、本人の意思を無視して決まったからだ。
まったく、俺の両親はどうなってるんだ！

まぁ、別にどこでもいいんだけどね。
おかげでこの三年間、猛勉強をすることになったけど。

「じゃ、行ってきます」
「頑張ってな」
「頑張ってね」

俺は両親の声援を背に、ヴェルス学園に向けて歩き出した。
ヴェルス学園までは、徒歩で三時間以上かかる。
つまり、俺が住んでいた街の二つ隣りの街に、ヴェルス学園はある。
だから、前日に学園近くまで行っておかなければ、大変なことになる。

「よし、頑張るか」

なんだかテンションあがってきたぞ？

俺は道中、ずっと受験勉強をした。
何処を受験しようとも、絶対に受験に必要なのは「国語」「数学」

「魔法」「白兵戦」「知略」「総合」の六つ。
国語、数学は日常生活において、知っておかなければいけないらしい。
残りは、この世界ならではのテストだと思う。
「魔法」においては魔人、「白兵戦」においては獣人、「知略」においては精霊が有利。
「総合」は人にとって有利なのだ。

しかし、ヴェルス学園は一味違う。
「国語」「数学」は普通のテストと同じだが、残りの四つは、受験生が三人一組（スリーマンセル）で受験する。
三人の種族は出来るだけ重ならないように振り分けられる。
つまり、一つの教科は、全員が不得意なものになる、という事。
どうやって合否を決めるかだが、それはテスト中の行動を見た先生方の意見によって決まる。
しかし、チームから合格者が出たからといって、そのチーム全員が合格するとは限らない。

そう考えると、やっぱり特殊な学園なんだろうか、などと改めて思う。

そうしている内に、目的の街についていた。
俺が住んでいた街より、ずっと栄えているため、一瞬街の活気に気圧された。

「すげー……」

俺は早速宿を探し始めた。
さすがヴェルス学園があるだけの事もあり、小奇麗な宿もすぐ見つかった。

しかも、その宿は受験の合否発表が終わるまでは格安になるらしく、金の心配もしなくていい。
自分の部屋に入ると、ベットに直行してしまった。

ばふっ

「はぁ〜〜〜〜」

少し休むつもりがそのまま寝てしまい、晩飯を食いそびれてしまった。

そして、入試当日。
当日っても、入試は今日から三日かけて行われる。
初日は「国語」「数学」。
二日目は「魔法」「知略」。
最終日は「白兵戦」「総合」。

「よっし、頑張るぞ」

俺は両頬を叩き気合を入れて、ヴェルス学園の門をくぐった。
そして、案内に従い、受験会場へ。

「それでは、始めてください」

周囲から一斉に紙をめくる音が聞こえた。
俺も急いで紙をめくり、問題を解き始めた。

〜一時間後〜

「終了です。紙を伏せてそのまま待ちなさい」

ふぅ……手ごたえはなかなかだ。
次は数学か。
元の世界でも、数学は大の得意だったため、今回の受験勉強でも大して苦労はしなかった。

「次は数学です。用紙を配るので、そのまま待ちなさい」

そして、担当の先生が次々に用紙を置いていき、準備ができた。

「では、始めてください」

再びペンを取り、問題に取り掛かった。

〜一時間後〜

「では、やめてください。紙を伏せ、退場してください。お疲れ様でした」

その声を皮切りに、会場にいた受験生たちは次々に退場していった。
俺もその波に乗り、宿に戻ることにした。
明日の試験に向け、体を休めるため、早めに寝ることにしたのだった。

第四話　ヴェルス学園の入試　その二（前書き）

評価を付けてくださった方、ありがとうございます！

第四話　ヴェルス学園の入試　その二

〜入試二日目〜

「ふぁ……」

現在、俺はあくびをかみ殺すのに必死だった。
実は昨日の夜、緊張して寝れなかったのだ。

―俺は小学生か！

「ふぁ……」

あくびをかみ殺しながら、ヴェルス学園に向かった。
今日は、今日明日の試験のパーティーメンバーが発表される。
俺は馬の合う奴等がメンバーになってくれることを、切に願っている。
発表方法は、ヴェルス学園の中にある掲示板に張り出される紙に、受験番号がチームごとに区切って張り出される。
そして、十チームごとに割り当てられた教室に向かい、そこでパーティーメンバーとの面会。
俺はヴェルス学園に着いたらすぐに、掲示板の方へ向かった。
そこには黒山の人だかりができていた。

「み、見えねぇ……」

掲示板に書いてある文字を読もうと思ったら、これをかき分けて進まなきゃならんのか……。

めんどいからもうちょっと待つことにしよう。
十分程すると、人もさっきより少なくなってきたので、俺は掲示板へと向かった。
俺の受験番号は「１４７６４」。

「１２５２３」
「１４７６４」
「０２１５７」

「？―？」

掲示板の端っこの方に書かれていた。
俺はそれを確認し、待機場所である？―？に行った。
待機場所では基本的に、試験の作戦とかを立てる。
俺は結構遅めに学園に着いたし、二人はもういるだろう。

「しっかし、でけぇな……」

校内は「バカ」が付くほどデカかった。
俺は少し驚きながら地図を見ながら目的地に向かい、教室のドアを開けた。
三人そろったチームもあったのだが、俺よりも遅い奴がいるらしく、十チーム中五チームがまだそろい切ってなかった。
俺は片っ端から声を掛けて行った。

「ちょっといいか？残りの奴の番号分かるか？」
「え？えーっと、『１４７６４』だったかな」
「あぁ、やっと見つかった」
「ということは、君が『１４７６４』番さん？」
「あぁ」

「やっとそろったー！」

お、最初っからビンゴだった。
俺が来たことに喚起する、目の前の女の子。
彼女には獣の耳と尻尾が生えていた。

「獣人か」
「そうだよ！」

凄く元気だな。

あ、種族によって外見が少し違っているから、わかったんだぜ？
獣人ならこの子のように、獣の耳と尻尾が生えている。
精霊ならエルフみたいに、耳がとがっている。
魔人なら褐色の肌。
人間はそれ以外。

ただ、人間と魔人の見分けが未だにつきにくい。
ただ単に日焼けしてるようにしか見えないからなぁ。

「それで、もう一人は？」
「あぁ、それならこの子だよ！」

そう言った獣人の子に、引っ張られたのは窓の外を眺めていた女の子。

「きゃっ！？な、なんですか？」
「後の一人も来たんだよ」
「え！い、いつの間に……」
「さっき来た所。気付かなかったの？」

「はい……緊張で……」
わかる、わかるぞその気持ち。
俺だって緊張してる。……柄じゃないけど。
「魔人……か？」
「え……？」
俺が発言したのがそんなに不思議だったのだろうか？
彼女にめっちゃ見られてるンすけど……。
すると、獣人の子が代わりに答えてくれた。
「そうだよ、この子は魔人だよ」
「そうか」
「そうだ、自己紹介しとこうよ！」
獣人の子が突然そう言いだした。
まぁ、確かに名前を知っておいた方が、何かと便利だろう。
「いいぞ」
「……」
未だに魔人の子がこちらを見てきている。
なんだ、俺なんかしたか？それか、俺の顔になんかついてるとか……。
「じゃ、私から！私はニーナ・クォルツ。ニーナって呼んでね！」
「……犬？」
ニーナの尻尾や耳を見た時から、そう思っていたのがついつい声に

出てしまった。

「犬じゃないよ！オオカミだよ！」

「悪いな、見間違えて」

オオカミか。

頬を膨らまして怒ってくる姿が、なんとも様になっている。

「じゃ、次は俺かな。見ての通り人間で、名前はレイ・サイズニアだ。好きなように呼んでくれ」

「……！」

俺の名前を聞いた途端、さっきまで俺の事を見ていた魔人の子が何故か驚いた。

しかし、それに気づかなかったニーナは、マイペース。

「じゃあ、レイたん！」

「却下！」

「えー、好きなように呼んでいいって言ったじゃん」

「だからって、たんを付けるってどういうことだ」

「ぶーぶー！」

「別の呼び方にしなさい」

「じゃ、レイっち！」

「……（´Д`）」

まぁ、さっきよりはマシだが……。

コイツのネーミングセンスはどうなんだろうか……。

「あ、反論が無いということは、決定？」

「……好きにしろ」

「やたー！」

俺は深いため息をつかざるを得なかった。

「じゃ、最後は君だね！」

「え！？あ、わ、わかりました！」

緊張しすぎじゃないか？

「わ、私は、サフィ・アンダーハートです……」

ん？サフィ？何処かで聞いたことのあるような……。

「……あ」

思い出した。

五年前、お婆さんを助けようとした女の子だ。

まさか、あの子が魔人だったなんて……。

「……あん時の」

「え！？」

俺がボソッと言っていた言葉に反応したのか、サフィは何かを期待するような目をこちらに向けて来た。

「お前、あん時の女の子だったのか」

「え？二人とも顔見知り？」

ニーナは何が起きているのか分からないようだった。

「あぁ、顔見知りって言うほどでもないけど……」
「どゆこと？」
「五年前に私のお婆ちゃんを助けてくれたんです」
「で、そん時に一度だけ会ってたってわけ」
「あぁ、なるほど！」
「あの時は本当にありがとうございました……」
「いいって、別に。それより、もうそろそろ試験開始みたいだぜ？」

俺は教室の入り口を指差した。
そこには試験監督官である先生が立っていた。
いつの間にかほかのチームも全員揃っており、試験開始時間となっていた。

「諸君！これより、入学試験の二日目を行う！呼ばれた番号のチームは来るように！」

そして、二日目の入試が始まった。

～テスト科目「魔法」～

ついに俺達の番が回ってきた。

「はぁ～……緊張します……」
「大丈夫だって！リラックスリラックス！」

俺達は案内に従い、試験会場に入った。
ちなみに試験会場は全部で二十ヶ所ある。
一ヶ所で、待機教室三クラス分やることになっているらしい。

「武器を選んでください」
試験官が指差した方には、様々な武器が並べられていた。
「私はトンファーだね！」
ニーナは迷わずトンファーを手に取った。
「俺は剣だな」
俺もオーソドックスな剣を手に取った。
「わ、私は、短剣で……」
サフィも短剣を手に取り、準備が整った。
「それでは、テスト科目『魔法』を開始します。これから召喚するモンスターはレプリカですので、本物よりは力は劣ります。ですが、だからといって気を抜かないように」
試験官が呪文を唱え、あらかじめ地面に描いてあった魔方陣から悪魔を呼び出した。
「あ、あれは？」
「デーモンだな。本で見たことがある」
たしか、主な攻撃方法は強力な魔法を連発することだったはず。
でも、レプリカだから魔法自体の威力はそんなに強くないのか。

「さて……どうするか……」
「来ます！！」
サフィが声を上げた。
それと同時にデーモンが魔法を放ってきた。
「おっ……」
「うわわ！！」
「シールド！」
サフィが魔術で作りだした盾で、相手の魔術を防いだ。
「シールドか……」
デーモンの弱点は、白兵戦ができないところだったはず。
つまり、白兵戦に持ち込めば、確実に仕留めることだ出来る。
しかし近寄るには魔法の雨を避けて、近づけなければならない。
「……」
作戦を考えている今も、デーモンの魔法は止まることはない。
「シールドで白兵戦に持ち込む……のは無理だな」
防御系の魔法は動くことが出来ない。
なら、一度だけすきを無理矢理作って、そこを一撃必殺で仕留める、っていう作戦で行くか？
それをしようと思ったら、打撃力が一番あるはずのニーナが適任だろうな……。
……え？俺？ムリムリ。あんまり力見せたくないし。

すきは作ろうと思えば作れる……。
あとの問題は、ニーナの打撃力がそこまでなかったらどうするか、ということだ。
―それに失敗すると、それぞれが孤立して、サポートどころじゃなくなる……
その時、俺の目に入ったのはデーモンを呼び出した魔方陣。
「そうだ、魔方陣だ！ニーナ！」
「な、なに？」
「両手を出せ」
「え？」
「いいから、出せ」
「う、うん」
俺はニーナの両手の甲に魔力で魔方陣を描いた。
「な、なにこれ？」
「気にするな。サフィ、いいか？俺が合図したらシールドを解け」
「い、いいんですか？いくら力が弱いといっても……」
「いいから。あと、シールドが解けたら、ニーナはデーモンに近寄れ」
「え？でも……」
「俺も一緒に突っ込んで、前でデーモンのすきを無理矢理作る。ニーナは俺の後ろについて来い、サフィは俺達のサポート。いいな？」
「わ、わかった」
「わ、わかりました」
二人とも納得いってない顔をしているが、ここはさっさと片付ける

に限る。
デーモンは今も魔法を次々に飛ばしてきている。
だが、それが一瞬途切れた。
「いまだ！！」
俺の合図と共に、サフィはシールドを解き、ニーナも飛び出した。
デーモンは飛び出してきた俺達に照準を合わせたのか、再び魔法を放ちだした。
「ハァァァァ！！」
俺はニーナの前を駆けながら、剣で次々に魔法を払っていく。
普通ならこんな芸当は軽々できないが、さすがはチートの持ち主である俺。
剣に魔力で薄い膜を作り、それで弾いているのだ。
これぐらいの力なら、使ってても目立たないし、使おうと思えば魔術が苦手な獣人以外なら誰だってできるし。
そんな俺を見てデーモンは焦ったのか、威力よりも連射の効く魔法ばかりを打ち始めた。
「これぐらい捌けるっつーの！！」
俺は腕を振る速さを上げ、的確に魔法を捌く。
「サフィ！動きを一瞬止める魔法でなんか使えそうなのあるか！？」
「は、はい、あります！でも、レプリカのデーモン相手でも、一瞬も効かないかもしれません！」
「それでいい！すぐに使ってくれ！」
「わ、わかりました！スタン！」

サフィが唱えた魔術をくらったデーモンは、ほんの一瞬動きを止めた。
俺はすかさず、後ろを走っていたニーナの腕を掴んだ。

「え？」
「行って、こぉぉぉぉい！！！」
「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

―さすがは獣人、俺に投げられたのにもう空中で体勢を直していた。
俺はニーナを投げ飛ばし、動き出したデーモンに斬りかかった。

「はぁぁ！！」

デーモンを俺に照準を合わせ、魔法を打ち出した。
俺は一撃目は避け、二撃目を剣で受け止め、わざと後ろに飛ばされた。

「ニーナ！そのまま殴りつけろ！！」

俺はニーナに向かってそう叫んだ。
ニーナはデーモンに向かって落ちながら、腕を後ろに引き絞った。
そして、デーモンが俺に投げられたニーナに気が付いた瞬間。

「インパクト」

俺はニーナの手の甲に描いた魔方陣を起動させた。
誰一人それに気づかず、ニーナはそのままトンファーを振り下ろした。

ドゴォォォォン！！

「「「え？」」」

試験官を含め、ニーナとサフィの三人は驚いた。
ニーナのトンファーは、デーモンを掻き消していた。
その上、試験会場にクレーターを作った。

「……し、試験終了です。お、お疲れ様でした」
「よーし終わったな」

俺は剣を鞘にしまい、試験会場を後にした。
その後に、慌てて残りの二人がついてきた。

「ね、ねぇ、レイっち。さっきのって、あの魔方陣のせい？」

ニーナは恐る恐るといった感じで聞いてきた。

「あぁ。あいつは瞬間的に打撃力を上げる魔方陣だ」
「あ、そうなんだ……よかったぁ……」
「何がよかったんだ？」
「いや、もしあれが私が出した力だったら、私の体っておかしくなったのかと思って……」
「そいつはすまんかったな」
「あ！それより、なんで突然投げ飛ばすの！前もって言ってくれないと！」
「悪い悪い」

こうして、テスト科目「魔法」は無事に終了した。

第五話　ヴェルス学園の入試　その三（前書き）

一日に二つ目投稿！

第五話　ヴェルス学園の入試　その三

～テスト科目「知略」～

午後、今度は知略のテストが始まった。
テスト内容は、以下のような感じ。

殺人の犯人が逃走。
それを追いかける騎士団とは別に、待ち伏せ班が用意され、その待ち伏せ班が受験生たち。
もちろん、これは実際に起こるわけではなく、シュミレーションでする。
で、知略のテストでは、どこで、どんなふうに待ち伏せをするか、それが問われる。
あらかじめ、逃走劇が行われる街の地形は教えられる。
地図も渡されるため、地の利は関係なくなる。

「次のチーム！」
「お。俺達みたいだぜ」
「よーし、頑張っちゃうぞ！」
「私も頑張ります！」

再び試験会場に足を踏み入れた。
武器はすでに取ってある。

「では、試験開始です」

試験官がそう言うと同時に、周囲の風景が変わった。

「なるほど、シミュレーションってこういうことか」
魔法で作り上げるとは。
「犯人が逃走を開始するのは、今から十分後です」
試験官の声が聞こえて来た。
「よし、じゃあ、その十分の間に作戦練るぞ」
「りょーかい！」
「分かりました」
俺は地図を開き、犯人が逃走を開始する地点にマークを付けた。
「ここが開始地点らしい」
「私達の現在地は？」
「ここですね」
サフィが指差したのは、マークを付けた地点と真反対ぐらいの位置だった。
「ここか……」
俺は地図を眺めた。
まず、犯人が最初に逃走出来る道は、真っ直ぐな大通り、入り組んだ裏道、そして曲がりくねった通り。
曲がりくねった通りは、大通りほどデカくは無い。
そして、騎士団本部は真っ直ぐな大通りに面している。
つまり、大通りは通らないだろう。

―犯人逃走が成功する場合は、どういう時だ？
この街は海に面している。
―ということは、海に到着すればいいのか？
いや、それはいくらなんでもわかりやすすぎる。
もっと考えろ……。
逃走経路は海じゃないなら、空か？
空は目立つな……。
じゃあ、地下？
地下……？

「っ！」

俺は急いで地図を確認した。

「あるな……」
「どうしたの？」
「ちょっと待ってくれ、もう少しで出てきそうなんだ」
確かにここを通れば、安全に逃げれるな。
ということは……！

「よし、こっちだ！」
「ちょ、ちょっと！？」
「レイさん！？」
俺は急いで駆け出した。

時間は無い。

「レイっち、説明してよ！」
「走りながらな」
「それでもいいから」
「分かった。まず、犯人の逃走が成功する場合だが、どこに逃げれば成功すると思う？」
「え？えーっと……海かな」
「そうだ。最初は俺もそう思った。だけど、それだとリスクがデカい」
「なんでですか？」
「ここは海に面してる街だ。海に逃走用の何かを置いている可能性を思いつかない騎士はいない。つまり、海には別の騎士達が配置されるはずだ」
「じゃ、海じゃないの？」
「あぁ、海じゃない。地下だ」
「地下、ですか？」
「あぁ。地下に行くには、一か所しかねぇ」
「それって……」
「ウェールだ」

ウェールとは、簡単に言うと井戸だ。
ただ井戸とは違って、海と井戸を地下でつなげて、海水をくみ上げれるようにしている。
つまり、犯人はウェールを使って海に出て、そのまま別の場所に逃げるだろう。
それで、この街にあるウェールは一か所だけ。

「だから、待ち伏せするなら、ウェールの近くだ！」
「なるほど！」

「急ぎましょう！今、逃走が始まったようです」
俺達は急いでウェールを目指すのだった。
「はぁ、はぁ、はぁ」
「サフィ、大丈夫か？」
「は、はい……」
サフィは苦しそうに走ってる。
大丈夫かな？
「もう着くぞ！」
よし、時間的にも間に合うはずだ。
「見えたぞ！」
「どうするの、レイっち！」
俺達はウェールの設置されている、ちょっとした広場に着いた。
「まずは、ウェールを隠す」
「え！？」
「魔術でですか？」
「あぁ、インビシブルで隠すぞ」
俺は魔方陣を描きだした。
「唱えればいいんじゃないですか？」
「念には念を押して、な」

魔法は大抵唱えるだけで使えるが、魔方陣を描いた方が同じ魔術でも威力が変わるのである。

「よし、できた。インビシブル！」

そして、ウェールは誰の目にも見えなくなった。

「これで、犯人も慌てるだろ」
「そうですね……」
「後は配置だ。俺たち三人が固まるのはまずい」

俺は物陰に隠れ、犯人の後ろを取る役目。
ニーナは真正面から犯人を迎え撃つ役目。
サフィはもしものために、海側の通路に待機。

「よし、行くぞ！」
「おっけー！！」
「頑張ります！」

よし、気合十分！
そして、待つこと五分。
広場に一人の男が駆けこんで来た。
その顔には焦りはなく、余裕ある笑みを浮かべていた。
だが、ニーナを見て、ウェールが無くなっているのを見た瞬間、焦りを見せだした。

「な、なんでここが！」
「いっくよー！！」
「ちぃっ！」

男は魔術を使い、ニーナを吹き飛ばそうとした。
しかし、俺がそれを許すわけもない。

「ハァッ！！」
「ンな！？」

詠唱途中に、後ろから攻撃された男は、そのままニーナの横を通り抜けた。

「あっ！」
「チッ！」
「あばよっ！ガキども！」

勝ち誇ったような表情で、海側の方へ駆けだした。

「サフィ、頼んだ！」
「はいっ！アイスキューブ！」

男はアイスキューブにそのまま突っ込み。

ガツッ

「いってぇぇぇぇぇ！？」
「はい、逮捕完了」
「ンな！！！」

男は力なく、うなだれた。

「そこまで！試験終了です。お疲れ様でした」

試験官の先生の声が聞こえた途端、周囲の風景は先程の試験会場に戻っていた。

「ふぅ……」

「やったー、捕まえれたね！！」

「レイさんのおかげです！」

「そんなことは無いさ。お前ら二人がいたから出来たんだ」

こうして、二日目の試験日程を終えたのだった。

第六話　ヴェルス学園の入試　その四（前書き）

総合ＰＶが、既に一万を超えていました……

（＾ｑ＾）　マジか

ありがとうございます！！！

第六話　ヴェルス学園の入試　その四

～テスト科目「白兵戦」～

入試最終日。
俺達は昨日と同じように、待機会場で待っていた。

「次のテスト、白兵戦だよね？」
「あぁ、そうだな」
「なんかわくわくするな～！」
「そりゃ、自分の得意分野だからだろ」
「そうなんだよ！」

やたらとテンションが高いニーナ。
それに比べ……。

「サフィ？大丈夫か？」
「ふぇ！？だ、大丈夫ですよ！？」
「明らかに大丈夫じゃなさそうなんだが……」
「そ、そんなことないですよ？」
「ふーん」

凄いきょどってる。
おそらく、次のテストが不得意科目だからだろう。

「さて、頑張りますか」

俺は特に得意不得意ないし、通常運転だ。

そして、俺達は試験官に呼ばれ、試験会場に入った。

「では、試験を開始します。先日の「魔法」と同じくレプリカですので、大きな怪我を負うことはありません」

科目「魔法」と同じように魔方陣から召喚されたのは、岩でできた３m級のゴーレムだった。

「レイさん、これは？」

「ゴーレムだな」

「ゴーレム？」

「ゴーレムは攻撃魔法を無効化するバリアを張っている。だから、潰すには近寄らなきゃいけねぇ」

「じゃ、早速！」

「待て！いくらレプリカのゴーレムだからといってうかつに近寄ると、吹き飛ばされるぞ？」

「え！？」

「動きは鈍くねぇし、一発は重い。誰か囮をした方が確実に仕留められる」

問題は、その囮を誰がするかだ。

「じゃ、私がする！」

「ダメだ。お前が攻撃の主軸なんだから」

「じゃあ、誰がするの？」

「……」

よく考えたら、俺しかいなくね？

「よし、俺がしよう」

「いいの？」
「俺しかできねぇだろ。サフィは白兵戦が苦手っぽいし」
「すいません……」
「別にいいさ。苦手にしてる物があるのは別に悪いことじゃねぇ」
「じゃ、レイっちが囮役だね？そろそろ、ゴーレムも動き出すよ」
「そうだな。よし、サフィは俺とニーナの援護だ。防御をしてくれると助かる」
「わかりました！」

俺達が話し終えると、ゴーレムが動き出した。
律儀に待っていてくれていたらしい。

「よっしゃぁ！行くぜ！！」

俺は剣を抜きながら、ゴーレムに突っ込んで行く。
ゴーレムは俺に狙いを定め、拳を振るってきた。

「俺にとっては遅いな！」

大振りの拳を体勢を低くし避け、岩と岩のつなぎ目に剣を突きだす。

ガキッ！

「ちっ！」

やっぱり、剣じゃ不利だな。
ニーナみたいな打撃武器じゃないと、今のも効果的じゃない。
ゴーレムみたいな敵には、関節を狙うのがオーソドックスな対処法。
しかし、それは打撃武器じゃないと効果が期待できない。

「うおっ！？」

ブンッ！

俺は咄嗟に後ろに飛び、拳を避けた。
ゴーレムは追撃に蹴りを放って来る。
風を切る音が、耳朶を打つ。

ゴォッ！

「チッ……」

俺は多少のダメージを覚悟し、剣でガードを試みた。

「プロテクト！」

ガッッ！

その時、サフィのサポートでガードができた。
が、威力までは殺せず、後ろに吹き飛んだ。

「っと。サンキュ、サフィ。ナイスタイミング！」

俺は空中で体勢を立て直し、着地。
ゴーレムは未だに俺をロックオンしている。

「やぁぁぁ！！」

ゴーレムが俺に向かって進もうとした時、後ろからニーナが殴りつけた。

バゴッ！

打撃音が試験会場に響き渡った。
だが、岩が砕けた程度で、ゴーレム自身のダメージはさほどない。
ゴーレムはまったくニーナに見向きもせず、俺に攻撃を仕掛けて来た。

「うおっと」

―なーんで、俺だけロックオンしてんのかな、コイツ。
左に飛んで避け、ゴーレムの足元に駆けだした。

「でやぁぁぁ！」

しかし、俺の力任せの攻撃は、まったく効くことなく。

「ちっ！」

これは同じことの繰り返しになりそうだな……。
仕掛けるか？

「ニーナ、左のひざ裏を狙って体勢を崩してみてくれ！」
「やってみる！」
「サフィ！」
「は、はい！」
「ゴーレムの右の足元に、防御魔法をなんでもいいからかけてくれ！」
「な、何をするんですか？」

「転倒させる！」
「わかりました！」
俺は剣を鞘に納めた。
「レイっち！？」
「いいから、集中しろ！」
「う、うん」
俺は目を閉じる。
意識を右手に集中させる。
―まさか親父に冗談半分で習った剣技が役に立つ日が来るとは……
静かに目を開く。
ちょうど、ゴーレムがサフィの張ったバリアに右足を取られて、体勢を崩している所だった。
そして、ニーナ渾身の拳がゴーレムの左のひざ裏に入った。
体重が乗っかってる左足のひざ裏を殴られたゴーレムは、ひざかっくんをされたように左膝を折られる。
そして、そのまま俺の方へと倒れて来た。
「レイっち！？」
「レイさん！？」
俺は焦らずに剣の柄を握った。
「……四閃・金刀比羅（コトヒラ）」
剣を抜き去り、神速で四度ゴーレムを斬りつけた。

今度は斬撃のすべてを、ニーナの攻撃で弱った部分に叩き込んだ。

ズズン！！

ゴーレムの体がばらばらになり、試験会場を揺らした。

「……はぁ」

俺は息を付き、剣を鞘に戻した。

「し、試験終了です。お疲れ様でした」
「レイっち、今のどうやったの！？」
「まったく見えませんでした……」
「ま、それは秘密だ」

コイツは親父が編み出した、親父の剣技だ。
俺は息子だから教えてもらえたが、普通に教えて回っていいもんじゃないのは分かる。

―それに、これ習得するのに、かなり苦労するし。

こうして、白兵戦の試験も無事（？）に終わることが出来た。

s
i
d
e

?

レイ達がゴーレムを相手していた時、ヴェルス学園のとある場所で男が一人笑っていた。

「ふ、ふふふ……コイツを使えばこの学園も終わりだな……フハハハハ！！！」

男は高笑いしながら、「総合」の試験会場に向かうのだった。

第六話　ヴェルス学園の入試　その四（後書き）

波乱の予感！？

第七話　ヴェルス学園の入試　その五（前書き）

たまたまランキングチェックをした所

日間ランキング、１８位
週間ランキング、９８位

でした。

読んでくださっている方、本当にありがとうございます！

第七話　ヴェルス学園の入試　その五

～テスト科目「総合」～

ようやく最後のテストだ。
最後は「総合」。
これは人間の俺にとっては、得意科目である。
そして、テスト内容とは。

「迷宮を抜けることらしいよ」
「迷宮か」
「途中には色々な仕掛けが施されているようです」

俺達は待機会場にて、そんな話をしていた。
なんと、俺達は最後まで残っていたのだ。

「最後とか、なんか嫌な予感がする」
「そう？迷宮とか、楽しそうじゃん！」
「いや、俺が言ったのは順番のことであってだな……」
「？」
「……いや、なんでもない」
「では、最後のチームの方。こちらへ」

そんなことをしていると、試験官の先生が呼びに来た。

「あれ？」
「どうしたの、レイっち？」
「いや、試験官の先生が今までと違うから……」
「あぁ、それはさっきまでの先生がちょっと倒れてしまいましてね

……代わりに私がしてるんですよ」
「そうなんですか」
なんだろう、この嫌な予感。
当らなきゃいいけど……。
「最後の試験はここです」
試験官の案内に従って着いた先は、屋外だった。
そして、地面に魔方陣が描かれていた。
「？」
俺は何故か違和感を感じた。
「ここから、試験会場となる迷宮に転送します」
「わかりました」
―ま、気にしててもしょうがない。今はテストに集中！
俺達三人は、その魔方陣の中に立った。
「では、試験開始です」
その言葉と同時に、俺達の体は転送された。

ｓｉｄｅ　？

「では、試験開始です」

俺のその言葉と同時に、ガキ共を迷宮に飛ばした。
当然迷宮っつっても、試験用なんかじゃねぇ。
俺特製の、バケモノ共が徘徊している迷宮だ。
あのガキ共が、無事に帰ってくるとは思えねぇ。

「……だが、念には念を押しておくか」

俺は迷宮の出口に陣取ることにした。

「クハハハ！」

ようやく、ようやくこの学園に復讐できる……！

side　out

気が付くと、そこはすでに迷宮の中だった。

「なんだか、不気味だね……」

「そ、そうですね……」

「……」

俺は耳を澄ませてみた。

ズル……ズル……ズル……

いたるところから、何かを引きずっている音が聞こえてきた。

「この迷宮、殺気が満ちているな……」

「殺気、ですか？」

「あぁ。とてもじゃないが、テストのために作られたとは思えんな……」

まさか、転送先を間違えたとか……？

いや、それは無いだろうな……。

「とりあえず動こう。一か所に留まるのはあまりよろしくない」

「そうだね」

「分かりました」

俺達は迷宮を脱出するため、動き出した。
本来、地図の無いテスト用の迷宮を抜け出すためのヒントがそこらじゅうにある。
しかし、この迷宮には一つとしてなかった。

「どうやって抜け出せってんだ」
「ここは野生の勘を使おう！」
「それができるのはごく少数だ。俺達がやったら迷うに決まってんだろ」
「う……それもそうだね」
「どうしましょう？」
「そうだな……って、なんか来たな」

考えていると、通路の先から何かが近寄ってきているのが分かった。
そして、その姿が認識できたとき、俺は愕然とした。
それは鎌を引きずっていた。

ズル……ズル……ズル……

「アウ……ゥウゥ……」
「な、なんでこんな奴が、ここにいるんだ！？」
「レイっち？どうしたの？」
「ありゃ、死神だ！危険度Ｓランクのモンスターだよ！」
「「え！？」」

こいつはまずいな……。
俺一人なら余裕だけど……。

「……二人とも、奴の鎌には何があっても触れるな。あれで斬られ

たら、動けなくなるぞ」
「りょ、了解」
「わ、わかりました」
「とりあえず、逃げるぞ。死神相手に真面目に戦ってたら、命が幾つあっても足りん」
俺達は死神に背後を見せないように、後ずさりしながら距離を取った。
「あの曲がり角まで行ったら、全速力で走るぞ」
二人は黙ったまま頷いた。
そして、曲がり角を曲がった瞬間、俺達は全速力で走り出した。
ズル……ガリガリガリガリ！
「ち……！追ってきやがった！」
「「えぇ！？」」
突然鎌を引きずる音が変わった。
死神は背後を見せた瞬間、ものすごい勢いで追いかけてくる。
俺はその場で止まり、振り返った。
「レイっち！？」
「レイさん！？」
突然俺が止まったことで、二人が驚きながら止まった。
「ホーミングレイ！！」

俺は死神めがけて、光属性の魔法を放った。
死神はそれを避け、そのまま俺に近寄ろうとした。
が、俺が放ったのは追尾性のある魔法。
死神は避けきれず、魔法が直撃した。

「行くぞ！今のは足止めにすぎん！」
「分かった！」
「はい！」

俺達は無我夢中に、迷宮を走り回った。
奇跡的に一度も行き止まりに会うことは無かった。
だが、何度も別の死神に遭い、そのたびに同じような手で足止めをしていた。

―でも、この死神たち、なんかおかしいような……

俺達は、気が付けば広場に出ていた。

―まさか、この運も自称神のチートが関係してんのか？

そんなことを思いつつも、広場で息を整えていた。
すると、そこへ声を掛けられた。

「まさか、本当にここまで来るとは思ってなかったな」
「「「！？」」」

声がした方を見ると、そこに立っていたのは俺達をここに飛ばした「人」の試験官だった。

「……アンタ、試験官じゃねぇな？」

「何でそう思う？」
「試験官がこんな所に受験生を飛ばすわけがねぇ」
「間違えたとは考えなかったのか？」
「間違えたらすぐに迎えに来るだろ」
「そりゃそうだな」
「それになんで試験会場の魔方陣じゃなくて、屋外に描かれた魔方陣を使う？」
「ま、確かに違和感だらけだな」

試験官（偽）はおもむろに手を掲げた。
その手には、宝石のような物が握られていた。

「まぁ、違和感云々はどうでもいい。お前らを始末する」
「なんで俺達を殺そうとする？」
「お前たちにゃ恨みはねぇ。俺はただこの学園を潰したいだけだ」
「潰したいだと？」
「あぁ、この俺を、俺様を追放したこの学園をな！来い、バハムート！！」

試験官（偽）がそう叫んだと同時に、後ろの地面に描いてあった魔方陣からバハムートが召喚された。

「危険度ＳＳＳランクのバケモンだ……抵抗しない方が苦しまずに死ねるぞ？」
「「「っ！？」」」

俺は無意識に剣を握りしめた。
だが、残りの二人は、バハムートの放つ殺気に中てられたのか、気絶して倒れていた。

「おいおい、そっちの二人は見ただけで卒倒かよ」
「くっ」
「お前は見どころありそうじゃねぇか」
「黙っとけ」
―無理な戦いだってのはよくわかってる……でも
「何もせずにおとなしく殺されるなんてことは、したくねぇ！」
俺は二人の周囲に防御魔法をかけ、ババムートと対峙した。

戦い始めて十分。

「くそ……！」

もう限界が近づいていた。

「まぁ、ババムート相手によくやったと思うぜ？」

男は笑いながら、ババムートに向かって命令した。

「じゃ、最期ぐらいは楽に行かせてやるよ」

ババムートは口の中で何かを溜め始めた。

「ババムートのブレスをくらえば、一瞬であの世だ」

くそ、いい気になりやがって……！

—仕方ねぇ……か

あんまし前世でやってたことをこっちではやりたくなかったけど、そんなことも言ってられんな。

「調子に乗るなよ……」

「あン？」

俺は剣をバハムートに投擲し、それがバハムートの目にクリーンヒット。

「グアアァァア！？」

バハムートは思いもよらぬ痛みに混乱し、溜めきれてなかったブレスを途中で吐き出した。
それは地面に大きなクレーターを作った。
その間に俺は空中に魔方陣を描き終えていた。

「……来たれ、南雲（なぐも）！」

俺の言葉に反応した魔方陣からは、俺が前世に使っていた居合い刀が姿を現した。

俺の前世の名前は「神木聡」。
神木家は先祖代々、武術の名門として知られていた。
俺は様々な神木流武術の中でも、最も居合いを得意としていた。
そして、俺の居合いの師匠から受け継いだのがこの刀、南雲である。
南雲は刀身幅が広く、重ねも厚い刀である。
俺が前世の最期で一人旅をしていたのも、修業の一環だったのだ。

そんなことはさておき。
俺は刀を納刀状態で腰辺りに構え、体勢を低くした。

「神木流居合い術、三十六代目『神木聡』の名に懸けて、貴様を潰す！」

俺はあえて前世の名を名乗った。

それは、この居合い術を使う時は神木聡でなければ、師匠に顔向けできないと思ったからだ。
バハムートは駆けだした俺に向かって、尻尾を振ってきた。

「神木流居合い術……牙狼！」

俺はその場でとどまり、右上から迫ってくる尻尾を迎え撃った。

ザシュッ！

「グギャァァアァァ！！」

俺が放った居合いは、バハムートの尻尾を二つに裂く。
俺は刀を鞘に納めながら、俺が使える魔法の中で最強な魔法を唱えた。

「デッドエンド！！」

これは大量の死神を呼び出す魔法だ。
ただし、先程の死神達とは違い、召喚者の言うことのみを聞く。
また、死神の鎌で斬りつけられると、生ける物はたちまち絶命してしまう。
バハムートは死神を鬱陶しそうに翼や腕で弾き飛ばしていた。
だが、数には勝てなかったようだ。

ザシュ！

一体の死神バハムートを斬りつける音が聞こえた。

「グギャァァアァァ！！」

一度しか斬りつけられていないのに、ババムートの動きは格段に鈍った。
それを見た死神たちは、一斉にババムート目がけて集結した。
これでようやく終わるように思えた。
だが。

「ホーリーボム！！」

なんと、男が一か所に集まった死神を、光属性の魔法で消滅させてしまった。
あの男の魔術の威力、普通の人が出せるもんじゃない。

―まさか、魔人なのか？

「なにしてやがる！さっさとそいつらを殺せ！！」
「グオォォォォ！！！」

ババムートは苦しみながらも、俺に向かってレーザーを吐き出した。
ババムートの溜めブレスより威力は劣るものの、直撃したら即死。

「神木流居合い術、滅呷（めっこう）！」

居合い切りでレーザーをなんとか横に逸らし納刀した。
ババムートは俺がレーザーを逸らしている間に、ブレスを溜めきったらしい。

「カッ！！」

ババムートのブレスが俺に向かって放たれた。

俺は神木流居合い術の中で、禁忌扱いされていた技を放った。

「……神木流居合い術……真空刃！！」

居合いの剣圧で作りだした真空の刃を飛ばした。
俺の体はそれを放った時の衝撃で、思いっきり踏ん張ったにもかかわらず後ろに吹き飛んだ。
その中であっても、俺はしっかりと自分の放った技がどうなったかを見届けた。

真空刃はブレスとぶつかり、ブレスを突き破った。
だが、軌道がずれたのか、それはバハムートに当たることなく、迷宮の天井を抉っただけだった。

―こりゃ、確かに禁忌扱いされるわな……

俺は体勢を立て直し、着地して男の方を向いた。

「……」

俺が今できるのは、ただ黙って睨み付けるだけ。
さっき真空刃を放った時、もうすでに体力の限界を超えていた。

「な、なんでバハムートのブレスに打ち勝ってんだ！？」

一人で盛り上がっちゃってるよ……。
さて、どうしたもんか……と考えていると、突然周囲から転移魔法独特の音が聞こえてきた。
そして現れたのは、ヴェルス学園の先生達だった。
そのうちの一人が俺に、もう一人がニーナ達の方へ向かった。

「大丈夫かね？」
「え、あぁ、はい……」
俺の方に来てくれた老人は、雰囲気だけで只者じゃないというのが分かった。
「そうか。ならば、あやつを捕縛せねばな」
そう言って老人は、男の方を向いた。
「ディグリス・モール。おとなしく捕まってくれるな？」
「……ハ！ふざけんなよ！おい、ババムート！」
シーン……
「は？な、なんで動かねぇんだ！？」
ババムートは空中に浮いたまま、固まっていた。
そして、次の瞬間、ババムートの体が砂になっていった。
「な、なんだ！？なんで消えてんだ！」
一人パニくる男。
「……もう一度問おうかのぉ。おとなしく捕まってくれるな？」
男は老人の言葉に動きを止めた。
「くそ……テレポート！」

「キャンセラー！」
「くっ！？」
男は咄嗟にテレポートを唱えたが、老人の妨害魔法でキャンセルされた。
「くそがぁぁぁぁぁ！！」
その後、男は暴れようとしたところを取り押さえられ、騎士団へと連行されたのだった。
そして、ひと段落ついた頃、俺は老人から声を掛けられた。
「すまんかったのぉ……危険な目に遭わせて」
俺は改めて老人をじっくりと見た。
「あなたは……学長、ですね……？」
「うむ、いかにも。よくわかったのぉ」
「学園関係者で只者じゃない人って言ったら、学長ぐらいしかいないでしょう」
「ほっほっほっ、そうじゃのぅ」
やっぱり只者じゃなかった。
しかし、学長がわざわざここに出てくるってどういうことだ？
「学長。一つお聞きしたいんですが」
「何かね？」
「学長は、あの男と知り合いですか？」
「……よくわかったのぅ」
「やっぱり……あの男はなんなんです？」

「うぅむ……巻き込まれたお主らには話さねばならんな……じゃが」
学長はそこでニーナ達と俺を見やり、優しい笑顔を浮かべた。
「また後日にしよう。今日は疲れたじゃろ。ゆっくり休みなさい」
そう言われると、今更のように疲労感が体を襲った。
「一週間後、合否の発表、その後始業式じゃ。お主らなら問題なく合格するじゃろうから、その時に話そう」
「分かりました」
こうして、俺達の最後の受験科目「総合」を終えることが出来たのだった。

第七話　ヴェルス学園の入試　その五（後書き）

昨日のＰＶが一万を超えてまして、感激いたしました！
重ね重ね、ありがとうございます！

第八話　学長にお呼ばれしました（前書き）

１０月２１日

これより前の部分、主に学園入試を大幅に修正しましたので、お手数ですが、もう一度読み直してください。すいません。

第八話　学長にお呼ばれしました

あの事件から一週間。
俺は一度家に戻り、家族との別れを済ませて来た。
そして、今日。

「試験結果の発表か……」

学長は大丈夫だって言ってたけど、やはり結果を見るまではドキドキする。
今現在、俺はヴェルス学園に向かっていた。
もうそろそろ結果が張り出されていることだろう。
そしてその予想は当たっていた。

「しかし、すごい混みようだ……」

近寄るのが躊躇われる……。

「そんなことも言ってられんな。よし、行くか」

俺は人をかき分けながら、張り出された合否の結果を見に行った。
ちなみに、受験者数１８００人のうち、３００人が合格できる。
えーっと、１４７６４、１４７６４……。

「お、あったあった」

ついでにクラスを見ておいた。

俺は？クラスだった。
ちなみにクラスは？〜？クラスまである。
別に？クラスだからって成績がいいわけではない。
クラス間の学力ができるだけ平等になるように振り分けられるらしい。

「さて、もう用は済んだし……さっさと離れよ」

俺は再び人をかき分けながらそこから離れた。
そして、合格者は教師の案内に従い、制服や学業に必要な物、寮の部屋の鍵などを渡される。
この学園の寮は確か、男女で別れていなかったはず。
まぁ、だからといって何をするわけでもないけど……。

「はい。制服、教科書、部屋の鍵です」
「ありがとうございます」

俺は自分の名前を告げ、渡してもらうものを受け取り、早速寮の部屋に向かった。
始業式兼、入学式が始まるまでに一度寮に入る時間が設けられている。
それは制服に着替え、荷物を整理するなど、その他もろもろの用事のために昔から設けられていたらしい。

「へー、ここが新入生の寮ねぇ……」

寮と呼ぶにはデカすぎるような……。
大型ホテルといってもいいじゃないだろうか？
……十一階建てだな。
たしか、一階は食堂とか、大浴場があるらしいから、実質十階分だ

な。

「さすが名門といった所か……？」

俺は驚きながらも自分の部屋に向かった。
俺の部屋は二階の２２１号室。
ちなみに、ワンフロア三十部屋。
それが十階ぶん。３００人ぴったしになる。
早速部屋の鍵を取り出し、中に入った。

「うわ……一人暮らしには贅沢すぎじゃねぇか？」

そこには一流ホテル並みの設備が整っていた。
それプラス、キッチン。

「……」

開いた口がふさがらないとはこういうことなのか？
いくら名門だとしても、やり過ぎなんじゃないだろうか……？

「ま、いいや」

俺は早速制服に着替えることにした。
この学園の男子の制服は、ワイシャツにズボン、ネクタイ、ベスト、ブレザー。
ネクタイは赤いが、それ以外はすべて黒。
ちなみに女子はネクタイは赤と同じだが、他はすべて白色らしい。

「夏は覚悟しないといけないな……」

この世界も四季はある。
それなのに、黒尽くめってどういうことだ。

「はぁ……」

今から先が思いやられる。
……主に暑さについてだが。
制服に着替えた後、俺はざっと部屋の設備を確認した。
なかなかに面白かった。

「お、そろそろ始業式だな」

俺はあらかじめ渡されていた始業式のある会場までの地図を手に取り、部屋を出た。
部屋を出ると、俺と同じように会場に向かう人達が見えた。
そして俺はそれに流されるように、会場に向かうのだった。

さて、会場に着いたのはいいが、これはこれでキチガイじみたデカさをしていた。
ダメだ、この学園。はやく何とかしないと……。
そんなお決まりのセリフを呟き、？クラスの座席に向かった。
さてさて、俺の席は何処だ？
俺は案内用紙を見て、そこに書いてあった番号の席に着いた。

「はぁ……」

席に着くと、自然とため息が漏れた。
疲れてんのかな、俺。
そして、しばらくすると始業式が始まった。

『えー、本日はお日柄もよく……』

今挨拶しているのは学長ではなく、副学長。

―話長そうだなー……。

俺の予想通り、副学長の説明は長かった。

『……えー、では、案内に従い、各クラスへ戻ってください』

ようやく始業式も終わり、後はクラスでの連絡を残すのみとなった。
その時だった。

「やっぱりレイっちだった！」
「あ、ホントです」
「ん？」

後ろから声を掛けられ振り返ると、そこにはニーナとサフィが近寄って来ていた。

「やっほ！」
「おはようございます」
「おぉ、久しぶりだな」
「そうだねぇ。あ、レイっち何クラス？もしかして？クラス？」
「あぁ、？クラスだ」
「お、一緒だ！」
「私もですね」

どうやら二人はさっきは前の方に座っており、俺は後ろの方に座っていたらしい。
俺達は談笑しながら？クラスに向かったのだった。
クラスに着くと、張り出された座席表で自分の席を確認した。

「左側の窓際の一番後ろか。ふむふむ……なかなかにいい席じゃん」

昼寝には持って来いだな。
ちなみに席順はこの世界でも五十音順なので、サフィはクラスのど真ん中ぐらいの席。
ニーナは俺の右隣の席。

「よろしくね、レイっち！」
「そう、だな」

俺は自分の席で日光を浴びながら、早速まどろんでいた。
だが、しばらくすると教室のドアを開け、担任らしき女性教師が入ってきた。
種族は人である。

「は～い！みなさん席についてくださ～い！」
その声に皆が席に戻って行った。
「え～、では、今日から私がこのクラスの担任です。キース・テレンです」
この先生、美人の部類に入るだろうな。
なんて思っていると、連絡事項が終わっていた。
まぁ、ちゃんと聞いてたけどな。
「では、自己紹介でもしていきましょうか！」
廊下側の前の席から始まった。
そして、少しするとサフィの番になった。
恥ずかしがり屋っぽかったけど、だけど大丈夫かな？
「さ、サフィ・アンダーハート、です。ま、魔族、です。しゅ、趣味は、読書です……」
最後は尻すぼみになったものの、言い終えていた。
また少しすると、ニーナの番になった。
まぁ、コイツは大丈夫だろ。
「ニーナ・クォルツです！見ての通り獣人だよ！趣味は、えーっと……体を動かすことです！よろしく！」
元気いっぱいに自己紹介を終えたニーナ。
周りもニーナの自己紹介で笑顔になっていた。

その時、突然眠気が襲ってきた。

―なんか、前の世界でもあったなこういうの……。

前は授業中に何度も寝て、先生に起こされてたっけ。

―珍しいな、俺が昔を懐かしむなんて……。

「……ィ君、レイ君！」

「は、はい！」

「最後、キミだけよ」

いつの間に……って、ニーナが自己紹介してたんだから、そりゃすぐ俺に来るな。

「レイ・サイズニアだ。種族は人。趣味は料理、昼寝だ」

俺はそう言って座ろうとした時、周囲からの視線に気が付いた。

最後なんだから、もっと喋ってよ

なんでもいいから面白いことしろよ

等々の意味が視線に含まれている。

「えー、なんか視線が痛いんだが……？」

俺がそう言うと、ほとんどが視線を逸らした。

「というわけで、気軽に話しかけてくれ。じゃ、よろしく」

俺はそう締めくくり座った。

「これで全員終わりましたね！では、今日はこれで終わります。あ、サフィさん、ニーナさん、レイ君はこの後私について来てくださいね？」

おぉう、すげぇ視線が突き刺さってくる。

ん？なんかしたかな？

……あ、学長の説明か？

「では、さようなら～」

先生のあいさつを皮切りに、教室は騒がしさを取り戻した。

そんな中、俺達三人はキース先生に連れられ、学長室に向かうのだった。

第八話　学長にお呼ばれしました（後書き）

感想にてご指摘、ご指導してくださった方々、ありがとうございました！

第九話　学長の説明会（前書き）

総合ポイント１０００超えました！
ありがとうございます！

第九話　学長の説明会

コンコン

「カタフ学長。三人を連れてきました」
『おぉ、入ってくれ』

俺達はあの後学長室に連れてこられ、今現在ようやく学長室に辿り着いた。
実はキース先生が迷子になりかけたのを、俺が学園の地図を奪い取ったのだ。

「おぉ、一週間ぶりじゃのぉ」
「はい、学長」

俺の後ろについて入ってきたニーナ達は、何故自分たちが学長に呼ばれたのか分かっていないようだ。

「それで、学長。約束通り、説明してください」
「わかっとるよ。キース君、もういいぞい」
「はい。分かりました。三人とも、くれぐれも失礼のないようにね」
「分かってますって」
「一番レイ君が不安なんだけど……」

ブツブツ言いながら、キース先生は学長室を後にした。
大丈夫かな、あの先生。一人で帰れるのか？
キース先生の心配をしていると、学長から声を掛けられた。

「さて、レイよ。お主に聞きたいことがあるのじゃが」
「なんです？」
「お主、あのバハムートと戦った時、何か違和感を感じなかったかのぉ？」
「違和感？」
俺はバハムートとの戦いを思い返した。
「……たしか、バハムートって危険度ＳＳＳランクなんですよね？」
「そうじゃ」
「それにしては、弱かった気がします」
いくら俺がチート級の力を持っていようが、危険度ＳＳＳランク相手にあの程度で済むはずがない。
「そうじゃ、その通り。あのバハムートは本物ではない」
「……どういうことです？」
「あれはレプリカのバハムートより劣っている、土塊から出来た人形じゃ」
「え？人形？」
「左様。魔力を動力に動くカラクリ人形じゃ」
……うーむ、どういうことだ？
「あのー、まったく話が見えないんですが……？」
その時、ニーナが声を出した。
「おぉ、すまんのぉ。お主らは気絶しとったからのぉ。知らんのも

仕方ない。これを見なさい」

学長は水晶を箱から取り出し、それからスクリーンのようなものに画像を映し出した。

そこには俺とバハムートが対峙していた場面が映し出された。

「お主らの記憶はここで途切れてるはずじゃ」

「一ついいですか学長。これはどうやって？」

俺は映像を指差して説明を求めた。

影から撮っていたのか、コレ？

「これはの、あの場所で起きたことを画僧として保存できる水晶なのじゃ。貴重な物なのじゃ、事が事だったんでのぉ。惜しんではおられんのじゃ」

そして、学長はニーナ達に事の経緯を軽く説明した。

「では、ここからが本題じゃ。ディグリス・モール。この男の事を話そうかの」

学長は一度深呼吸をした。

「ディグリスはわしの教え子じゃった」

「教え子？」

「あぁ。わしがここの学長になったのは五年前。それより前は一教師として働いておったのじゃ」

「その時にディグリスを受け持ったと？」

「うむ。ディグリスは非常に優秀な魔人じゃった。ただ、召喚系の魔法はからっきしだったがのぉ」

「「魔人！？」」
「やっぱり魔人か……」

ニーナとサフィは、映像の中のディグリスをもう一度見た。

「でもこの人、褐色の肌じゃないですよ？」
「かといって獣人でも精霊でもないですし……」
「おそらくじゃが、試験会場に潜り込むため人に扮したのじゃろう。ディグリスは悪知恵が働く男だったからのぉ」

学長は苦い顔をして、そう言った。

「じゃが、優秀すぎたディグリスは、謙虚さというものを忘れ、どんどんつき上がって行ったのじゃ」
「なるほど……」
「そして、ついにディグリスは禁忌を犯した。今から思えば、あの時からディグリスは狂い始めていたのかもしれんのぉ……。禁忌を犯したディグリスは学園から追放された上に、プラン大陸に飛ばされたのじゃがの」

禁忌と聞いただけで、だいたいの想像はついた。
禁忌とは、魔術におけるルールである。
新術を開発する際、禁忌に触れないように気を付けなければならないと、昔本で読んだ事がある。
例えば。
人体実験を行ってはならない。
環境に悪影響を与えてはいけない。
等々、心構えをはじめとした施行してはならない魔術までも細かく決められているのだ。

「それでその、き、禁忌っていうのは、な、なんですか？」
ニーナは学長に恐る恐る聞いていた。
「……新術開発のために、人体実験を始めたのじゃ……」
「「「っ！？」」」
さすがに驚いた。
人体実験ってどういうことだよ……。
「そして、わし等が気が付いたときには、既に十人近く被害が出ておった」
「うぅ……」
サフィは口元を押さえながら、青い顔をした。
おそらく想像して、気持ち悪くなったんだろう。
「ディグリスの開発していた新術ってのはなんです？」
「……少し違うのじゃが、簡単に言うと死霊術の一つじゃ」
「死霊術！？」
「おや、知っておるようじゃの」
「ありゃ禁忌中の禁忌じゃないのか！？」
さっき話した施行してはならない魔術の中でも、もっとも危険な部類に入る魔術だ。
死んだ魂を呼び起こすため、世の理を無視する魔術なのだ。
施行者にはそれなりの代償をささげる義務があるはずなんだが。
まさか……！
「そうじゃ、レイ。お主の思っている通りじゃ。ディグリスはさら

った者の命を代償に、死霊術を施行したんじゃ」
「な、何のために……！」
「何の罪もない人達を、犠牲にするだなんて……！」
ニーナとサフィは静かに肩を揺らして憤っていた。
「死霊術とは少し違うってどういうことです？」
「そうじゃのぅ……この映像で言えば、あのバハムートかの。あとはあの迷宮におった死神たちもじゃな」
「え？」
「あの様子じゃと、最近あの術が完成したようじゃの……」
「ど、どういうことです？」
「先程、あのバハムートは人形じゃと言ったじゃろ？あれは土塊に死霊術で魂を移し、動かしていたようじゃ。おそらく、宿らせれるのは一人分の魂が限界じゃったのじゃろう。バハムートの活動時間があまりに短すぎる気がするのじゃ」
「ということは、バハムートとか死神は人の魂を動力に動いていたってことですか……？」
「うむ……あまり考えたくないことじゃがの……」
「……」
重たい沈黙が学長室を支配した。
「しかし」
不意に学長が声を発した。
「元凶であるディグリスは捕えられ、騎士団の特別牢獄に幽閉されておる。もう二度とこんなことは起きないじゃろう」
「特別牢獄？」

聞きなれない単語に俺は聞き返してた。

「うむ。その中では魔術は使えない上、魔力は吸い取られる。決して逃げ出すことはできん」

「そうですか……」

「うむ。安心せい。この学園にもしものことがあれば、わしが全力で生徒全員を守るからの」

不思議と学長のその言葉を聞くと、安心できた。

それはニーナとサフィも同じだったらしく、安堵の色が顔に浮かんでいた。

「ときにレイよ。お主、本気を出せばどうなるのじゃ？」

「え？」

一瞬、何故かドキリとした。

そんな後ろめたいことも……な、い、よな？

別に俺がこのチート級の力を望んでたわけじゃないし。

「いやなに、お主を最初に見た時、素人ではないと思ったもんでな。気にしないでいいぞぃ」

「は、はぁ……」

「さて、今日は帰って部屋の片づけをしなさい。引っ越ししたばかりじゃから、大変じゃろ？」

「そ、そうだった！」

ニーナは学長の発言にギクリとなり、慌てだした。

「今日中に終わりそうにないよ～……」

「あの、手伝いましょうか？」
「いいの、サフィ！？」
「はい、私はもう終わってますし」
「はやっ！」
「では学長。これで失礼します」
「うむ」
「あ、学長、失礼します！！」
「あ、失礼します……」
「うむ」

そして、俺達は学長室を後にしたのだった。

ｓｉｄｅ　？

レイ達が学長の説明を受けたその日の夜。
ディグリスが捕えられている特別牢獄がある騎士団の近く。

「ここか……」
「うむ、わらわの情報が正しかったらのぉ」

闇夜に溶け込むようにして、静かにたたずんでいる二つの影。

「あのバカは手間がかかる……」
「そう言ってやるな。早速助けに行こうではないか」
「……」

二人は特別牢獄に向かい始めた。
正面から堂々と。
しかし、門番である騎士はまったく気づかない。
そして二人はそのまま特別牢獄の前に辿り着いた。

「これを壊せばいいんだな……」
「うむ、ただ激しくはしないようにの」
「わかった……」

そして一歩前に踏み出した男は、牢獄の扉に手を置いた。

『融けよ……』

男の声と共に手をかざした場所が、ドロドロと溶けだした。
そして、十秒も立たないうちに、扉は跡形もなくなった。

「おい、ディグリスよ。わらわ達が助けに来てやったぞ」
「く、おせぇよ……」
「随分とやつれておるの」
「魔力が根こそぎ持ってかれてんだよ……」
「仕方ないのぉ、出てこい」

ディグリスは牢獄から這い出してきた。

「よし、転移するぞ」
「……」
「く……クソジジィ、覚えてろよ……！」

そして、三人の姿は転移独特の音と共に消えたのだった。

s
i
d
e

o
u
t

第九話　学長の説明会（後書き）

さて、ここからどういう展開にしていくか……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5355x/

え、転生？ウソでしょ！？

2011年10月22日02時11分発行